

主題「万事に時あり」

聖書 伝道者の書 3章1-11節

1 伝道者の書

(1) 著者は、「エルサレムの王、ダビデの子、伝道者のことば」とあるので、ソロモンと考えられます。
ソロモンと言えば、「栄華を極めたソロモン」と言われていました。

(2) 伝道者の書の目的は、ソロモンによる2つの視点を持って生きた体験を伝えようとしています。

① 「日の下」で、物事を見る考え方

⇒ 「今、目に見えているこの世界が全てだと考えて、神様を信じないで、自分の力で生きていこうとする」生き方

「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になるだろうか。」この箇所を別の聖書の訳で読んでみると、「無意味だ。無意味だ。全く無意味だ。この地上でいくら労苦しても、何の益もない」(伝道者の書1章2, 3節)

② 「天の下」で、物事を見る考え方

⇒ 「目に見えない神様の存在を信じて、神様の導きに身を委ねて生きる」生き方

すべてのことには定まった時期があり、天の下のすべての営みに時がある。(伝道者の書3章1節)
神のなさることは、すべて時にかなって美しい。(伝道者の書3章11節)

2 伝道者の書2-8節の具体的な時のたとえ

- 2節：「生まれる時と死ぬ時」「植える時と抜く時」のように「始まりと終わり」を対比
- 4節：「泣く時と笑う時」「嘆く時と踊るとき」のように「喜びと悲しみ」を対比
- 当時のイスラエルの習慣の中には、「美しい」とは言えないものも含まれている
 - ・ 3節「殺すのに時があり」＝「事件や事故、戦争などによって、人のいのちが取り去られること」
 - ・ 5節「石を投げ捨てるのに時があり、石を集めるのに時がある。」
＝「攻撃を始めたり、その準備をしたりすること」
 - ・ 7節「裂くのに時があり」＝「激しい悲しみを表現する際に衣を引き裂く」

3 全ての人にとって、しかもいつの時代でも、どこの国においても共通して「美しい」とは言えないテーマ

⇒ 「死ぬのに時がある」

⇒ 「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」というみことばの中に、「死ぬのに時がある」が入っていることを、どう受け止めたらいいいでしょうか。

⇒ 3章11節には、「神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行うみわざの始まりから終わりまでを見極めることができない。」というみことばが続きます。

4 神は、この世の全ての不条理なできごとを受け止めてくださるために、イエスキリストを与えてくださいました。

「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」(ピリピ2章6節-8節)



『死よ、おまえのとげはどこにあるのか。』しかし、神に感謝します。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」(第一コリント15章55節、57節)

5 結論

私たちが心から愛してくださる方を、どうして恐れる必要があります。もし恐れがあるなら、それは、神が私たちに何をなさるのか不安をいだいているからです。神の完全な愛は、そんな恐れをすべて取り除きます。恐れている人は、神の愛をまだ十分理解していないのです。」(Iヨハネの手紙4章18節)



「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」(ローマ8章28節)